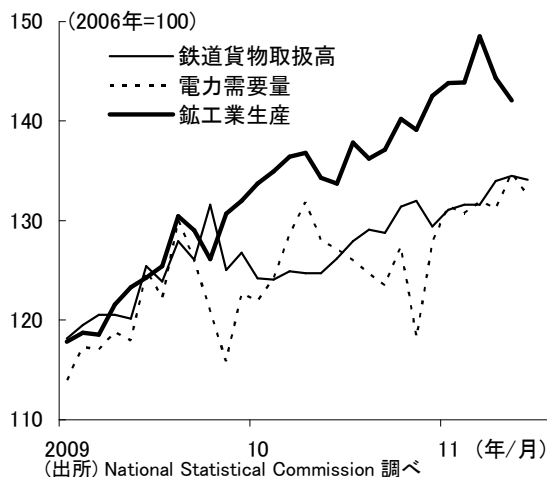


外需とITサービスが牽引するインド経済

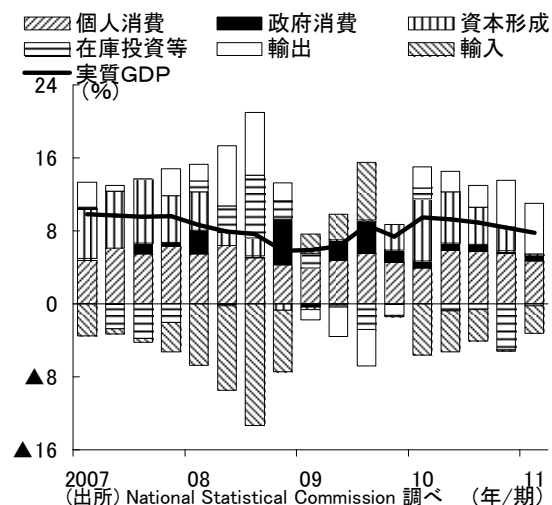
～ 金融引き締めで内需はペース・ダウン ～

- (1) インド経済は、相次ぐ金融引き締めの効果が次第に浸透するなか、本年春以降、驕りが広がる展開。鉱工業生産は本年3月をピークに下落（図表1）。一方、鉄道貨物輸送取扱量は4月以降頭打ち。電力需要量も6月前月比微減に。消費者物価は5月の前年比9.6%から6月9.1%へ若干鈍化したものの、卸売物価は5月の前年比9.1%から6月同9.4%へ加速。消費者物価の騰勢も依然根強く、インフレ圧力の後退は当面見込み薄であり、インド経済のペースダウンは不可避との見方も。
- (2) しかし経済成長の原動力をみると、昨年末以降、外需の牽引力が増大（図表2）。内需から外需へのディマンド・スイッチングの兆し。第一の原動力は製品輸出の増大。従来、輸出はダイヤモンドや金などの貴金属および綿花や鉄鉱石など素原材料が中心。もともと、近年、製造業の台頭が進行。自動車輸出の増加が典型例（図表3）。本年入り後、国内販売台数がそれまでの力強い増勢から一進一退へ転じるなか輸出台数が増加へ。季調済年率ベースでみると、2009年の100万台半ばから本年春には200万台半ばへ、ほぼ百万台の増加。
- (3) 加えて、昨年秋以降の経常収支の赤字幅縮小はサービス輸出、とりわけITサービスの成長が原動力（図表4）。背景には人材強化やインフラ整備に伴うインドIT産業の国際競争力の強化と積極的な海外攻勢。加えて、08年初に比べれば減少したものの国内投資を支える対内直接投資が引き続き高水準。このようにみると、内需のペースダウンは不可避としても、製品輸出やITサービスなど外需にリードされ、堅調な成長が続く公算大。

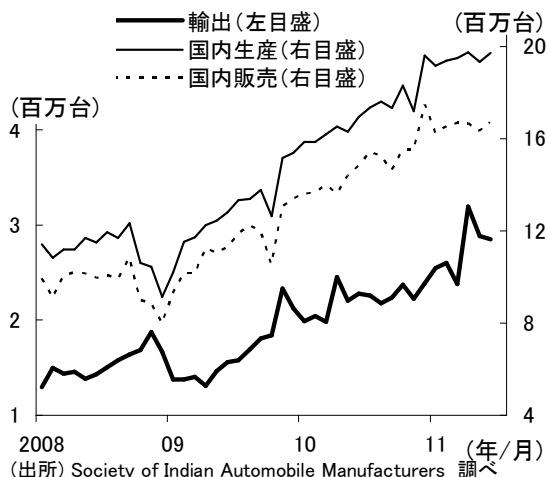
（図表1）インドの鉄道貨物取扱高と電力需要量、
鉱工業生産の推移（季節調整済）



（図表2）インドの実質GDP成長率（前年比）



（図表3）インド自動車生産・販売・輸出台数（季調済）



（図表4）インドの経常収支と対内直接投資

